
俺たちの空。

0 1 1 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちの空。

【Nコード】

N8409X

【作者名】

0110

【あらすじ】

松下春馬は中学校に行っていない15歳。いつも剣の練習をしている身長がやや低めで顔かそこそこな人だ。ある日、いつものように剣の練習をしていたらいきなり少女がとび蹴りしてきて勝負に挑まれた。春馬はその勝負に負けてしまい、代償としてその少女が家に家族として居候してきた。笑いあり、少しだけ下ネタと感動があるファンタジー的な物語でございます。時々パクリもあるの
でご注意を。

プロローグ

今は午前12時、学校に行く時間だ。だが俺は学校に行っていない。この意味わかるか？（…まあたいていの人はわかるけど）…そう不登校だ。理由は勉強ができないからじゃないし、友達関係とかじゃないし、特に理由はない。ただめんどくさいだけだ。学校に行ってもなんになる？勉強なんて家でやればいい。学校に行かなくても俺はそれなりに頭はいいし、友人もいらなと思う。ただギャーギャーギャーギャー生徒が騒ぐだけ。邪魔なだけだ。だから学校なんかに行っていない。もちろん母親はこのことは知っている。別に母親は学校に行けなどは一回も言っていない。初めてこのことを知った時も「あら、そうなの」というだけで何にも気にしてはいない。この母親は理解がきいててよかった。ふつうの母親ならば、学校に行けとか言うからめんどくさい。ほんとにこの母親に生まれてきてよかった（喜）ちなみに父親は俺が生まれる前に死んじゃったから、今はいないし、顔も知らない。どんな人だったかも知らないんだ。…まっ、それは置いて、俺は今、裏山にいる（…ほら、あれよ、時々ドラ もんに出でくるアレよ）。まわりには枯れ葉が散らばっていて、黄色い葉、赤い葉がうまいぐらいにきれいだ。そういえばもうすぐ10月。紅葉のシーズンだ。もうすぐ黄色い葉や、緑の葉が赤く染まるだろう。そして冬になって、春になって、夏になって。そして葉はまた、緑になって、秋になったらまた、赤に染まる。こう繰り返して意味なんかあるのか。もし意味なかなかったらなぜこう繰り返しているのか。…と俺は思っている。そして俺はいつも使っている使い切った古びた竹刀で、剣の稽古をしている。これも俺は剣道で世界ジュニア大賞を持つほどの実力だ。…なんて嘘。自分の実力なんて知らない。一回も戦ったことなんてないからだ。俺はコミニケーションが苦手だし、人と接することなんて中学校1年生から一回もない。あつ自己紹介するの、忘れてた。俺の名前は

春馬。松下春馬だ。15歳で男、身長は…155センチぐらい…、比較的には小さいほうだ…。小学校の頃も、列は前のほう、いや一番前だった…。あ、でも顔はいけてるほうだ。よくバレンタインでチョコをもらったし、告白されたこともある（それも何回も）。だから身長なんて顔でごまかされるからあまり心配してない。…何しやべっていたっけ。あつ剣のことか。だから俺はだれかと戦いたい。勝負したい。そして自分の実力を知りたい…と思ってる。そう思いながらいつも俺は稽古している。そして今日、いつもとは違うことが起きる。いつもの空、いつもの風景、いつもと同じ時の中で起きるんだ。いつもと違うことが…。

ドS少女には勝てません。

プロローグでも俺は言った、いつもと違うことが起きると。まったくそのとおりだ。どんな内容かって？それを今からはなす。あのときは剣の練習を俺はしていた。練習といっても剣で素振りを何回もしているだけだが、これが結構はまる。1時間から2時間。多いときは4時間も素振りをしていた時もある。裏山にはめったに人が来ない。だから俺は集中して剣の練習ができる。「これでいいかな」今日も俺は剣の練習を終えた。今日は1時間ぐらい練習をしたと思う。ちょっと疲れた。もうすぐ昼だ。俺は母親のお弁当を出した。母親は料理がうまい。お弁当にはいつている卵焼きはいい焼き具合で半熟になっている。もちろん味も最高だ。たこさんウインナーも形が綺麗で味も絶品。でも俺が一番好きなのはホットケーキだ。ふわふわした感触、溶かしバターの香ばしい香り、甘さも控えめでもおいしい。もちろん今日のお弁当にはホットケーキが入ってる。俺はどちらかという好きな食べ物最後に食べる派だ。だからホットケーキは最後に残す。これが俺のセオリーだ。そしてお弁当を食べて、最後に残ったホットケーキを食べようとした。その時俺は幸せの絶頂にいた。まわりはもう天国みたいになり(妄想)、ホットケーキが翼を広げ、ゆっくりと口に近づいてくる。俺はもう幸せすぎておかしくなりそうだ。もしかしたらもうすでにおかしくなっているかもしれない。ああ、幸せのファンファーレが聞こえる。ホットケーキはもうすぐ口という幸せの門をくぐりそうだ。そして歯というドリルに砕かれ、腸のトンネルをくぐり、最後は二つの大きな山の間にある門から茶色い遺物となるだろう。いよいよ門をくぐるうたした時、「とうっ！」「ぐへっ！」幸せのファンファーレが雑音となり、ホットケーキの翼が折れ、幸せの門にくぐれなかった。後ろからとび蹴りされたからだ。「誰だよッ！幸せの門をさえぎるのはッ！」

絶望だ。ホットケーキは翼が折れ、地面に横たわっていてぐったりしている。「いったい誰がこんな恐ろしいことを！」…と思いなから後ろむく。そこにいたのは1人の女の子だった。黒い髪でショートヘア。歳は14ぐらいで身長は俺よりでかい(悔)。まっ顔は俺のほうに美形だけど。「人のナワバリに入るなんて、度胸が強いねチビが」俺は殺意が芽生えた。理由は数えきれないほどある。おまえのナワバリだと!?ここは俺のナワバリだ!俺のホットケーキを無残な姿にしてその態度はなんだ!?チビだと!?おまえのほうにチビ…なんでもない(汗)。「ざけんなよアホが、殺されたいのかッ!」俺は今までの怒りと悲しみたちを少女ぶつけた。どうだ怖いだろ、足が震えるだろ!だか少女は全然怖がってない。むしろ笑ってやがる(ウゼエ…)。「殺す?あんたほんとにわたしを殺せるの?」…どおいう意味だ?。「私はその気になればいつでも殺せるけど?」コイツ、かわいい(?)顔をして結構怖いことを言う。「そうゆう顔にはみえないけどな」と俺は思った。でもほんとにそう思った。もしかしたらコイツ、今までで何人も殺してきたのか?「あら、いいこと言うね」。でも私は誰だって殺せるよ。そう、誰でもね!」コイツ。「試しにあんたを殺してみるけど、どう?」「…上等だ。」コイツはおかしい。俺はそう思った。だけど俺は勝負に挑んだ。殺すなんて嘘だ。殺したら犯罪だし、終身刑で自分も死ぬかもしれない。コイツはこんなに度胸なんてない。だから俺は勝負に挑んだ。それに自分の実力がわかる。まさに一石二鳥だ。「さあ、はじめようか」俺は絶対にかてる。そう思ってた。だけど違ってた。あいつは強かった。そこら辺の強いやつじゃない。動きが見えない。一つ一つの攻撃が破壊力満点で竹刀も握りつぶされ粉々になってしまい、ほんとに殺されそうだった。まるでファンタジーに出てくるラスボス…いやそれ以上かもしれない。あいつはボロボロな俺の背中に乗り、「大ジョブですか?」といった。なんかなれなれしい。「…これが大丈夫に見えるか?」「本気は出してないんだけどね」ウゼエ…むかつくわ「でもはじめてにしては強いんじゃない

い？」「…えっ？」なんで知っているんだ？「ねね、それより取引しない？」「…取引？」何言ってるんだ？コイツ…「あんたを殺さない代わりに、私を家族として家にいさせてくれない？」「ただけ理不尽で自己中なんだ…」「意味が分からない」と俺はささやいた。「無理とは言わないよね…？」脅迫してやがるこいつ…「いーじゃん別に。減るものなんてないしょ！」いやあるから、絶対に減るものがあるから。「ドラ もんだって居候してきたじゃん。ポケットから便利な道具出せるじゃん。私も同じだよ。まったく同じだし、便利だよ。まっ、スタイルや顔は私のほうが上だけどね」全然似てねーよ！テメーなんか全然便利じゃねーよ！おまえよりドラ もんのうん のほうが便利だわ！」「…悪いけど、母さんがなんて言うかわかんないし、いきなり家族が増えると出費とかがかかるし…」と「りあえず優しく断った。「じゃあ殺すね」と少女は言って、近くの木に殴りかかって、気を真つ二つにした。コイツに逆らったらマジで殺される…「じゃ、じゃあ、母さんに聞くわ。よくてもだめでも殺さない。これでいいか？」「あんた自己中だな…」「おまえに言われたくねえよ。「じゃあ行こうか」少女の一言で俺と少女は俺の家に行くことになった。俺の家は裏山から25分ぐらい。いつも歩きでいつている。今日は歩きなので早歩きで家に向かう。早くこなやつからおさらばいて自分の時間を取り戻したい。母さんは理解がいいからわかってくれるだろ。はっはっはっ！、ざまあねえぜ！。俺の家に居候？そんなドラ もんみたいなファンタジー世界にしかありえねーよ！俺の勝ちだな、この勝負！（さっきは負けただけ気にしない、気にしない）」「ところで、あんたの名前は？」少女は聞いた。そういえばコイツに何にも自分のこと言っていないな…まっ最後に花を持たせてあげようか。と思い「松下春馬だ。春馬って呼んでくれ」と自己紹介をしてあげた。「秋菜って名前だ。よろしく」秋菜か…フーンいい名前だなと思い、やっと家についた。ここでやつとおさらばできる…はずだった。「別にいいよ」母さんはいった。えっ、嘘だろ！？なんでだッー！？ねね、冗談だよな？嘘だよな？

お願いだから嘘だと言ってくれー！！」「か、母さん！なんであんな奴家に入れるんだよ！？」俺は嘆いた。「あんた、友達少ないつしよ。少しでも友達を増やすために家にいれたの。それに家族が増えるなんて嬉しいとは思わない？」全然嬉しくねーよ！！」「か、母さん…」母さんだけは理解がきいてる人だと思ってたのに…がっかりだよー！！うわーん！！

こうして松下家に新しい家族がふえました。これがいつもとは違うことだ。そしてこれからも…ダレカタステ…（涙）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409x/>

俺たちの空。

2011年10月23日17時09分発行